2018年2月26日(月)　讀賣新聞

（第3種郵便物認可）

震災語り部の役割とは

南三陸でシンポ　国際的な方策探る

「全国被災地語り部シンポジウム」が25日、南三陸町の南三陸ホテル観洋で始まった。東日本大震災や阪神大震災の語り部ら約400人が参加。世界各地で災害が発生する中、震災の経験を国際的に普遍化する方策や、震災の記憶をどのように語り継いでいくかを探った。

南三陸町と兵庫県淡路市の民間団体などが企画し、2016年に同町、17年には同市で開かれており、今年で3回目。

「普遍性・持続性のある震災伝承と震災遺構」をテーマにしたパネルディスカッションで、東北学院大の柳井雅也教授は発生から時間が経過することで語り部の役割が変化すると指摘。「ただ教訓を伝えるだけでなく、行動を促すことが必要になってくる」とした。外国人などの被災者は地域の規範が分からないことも議題に上がり、震災で妻を亡くした気仙沼市の元消防職員佐藤誠悦さん(65)が「災害時は心をつなげる共助の意識が必要になる」と訴えた。

その後、三つの分科会が開かれ、「未来への伝承」をテーマに取り組みを語る会では、児童・生徒が震災の教訓を伝えていくことを誓った。

このうち、震災の津波で9人の生徒が犠牲になった福島県立新地高（同県新地町）2年の佐藤仁奈さん(17)は、同校の中庭で昨年3月に追悼と祈念の植樹を始めたことを発表。さらに、被災者からの体験談を募り、文集にまとめて被災の記憶を学校でつなぐ活動も紹介した上で、「今後、全生徒で意識を共有していきたい」と語った。

児童、生徒が震災伝承の活動状況を発表した分科会（25日、南三陸町で）

シンポジウムに先立ち、震災遺構「高野会館」の見学会が開かれた。参加した同校2年の増田汐里さん(17)は「地元の語り部に震災当時の様子を聞き、町ぐるみで伝える必要性を感じた」と話した。

最終日の26日には宮城、岩手両県の語り部による講話などが行われる。